

春のクレプスカ 2020

朝	禰覇 楓
音楽	二三川 練
虚像	穂高 遊
silent letter	穂高 遊
清明	戸嶋 歩
ワンルーム	戸嶋 歩
散歩日和	志邑 左記
春になる	久間木 志瀬
土地の言葉	篠尾 早那

奥付

朝

禰覇　楓

三面彩光の高層マンション
アンティークの洒落た食器に
サラダと卵焼きが盛り付けられてる
電動のコーヒーミルと怒鳴り声
ばたん、と閉まるドア
さわがしい朝
天気予報を見て家を出る
うっかり今日もバスを逃した

雲がひとつある
ばかみたいに青い空と
アスファルトの割れ目で花を咲かせた雑草と
ベンチの錆びた釘が同居してる景色が
なんとなく好きだと思う
次のバスは今日も遅れてるみたい

音楽

二三川　練

たとえば
ギター一本で世界中の人を幸福にするような歌手が
巨大なスピーカーから流れる電子音声に
殺されてしまった日
わたしたちの目は
街中に張り巡らされた監視カメラよりも精密に
わたしたちの生活をひもといてゆく
右手を挙げてはならない
それは抵抗を意味するから
左手を挙げてはならない
それは哀悼を意味するから
両手を挙げてはならない
それは服従を意味するから

たとえば
世界中の人が
ギターの弾き方を忘れた日
遊具の無い公園で
子どもたちは大人にあたえられた歌を輪唱する
玩具の銃で撃ちあいながら
その銃口を両親にむけようだなんて
考えもつかないちいさな脳みそには
規則的な皺がきざまれている

たとえば
世界中の鳥が
さえずることをやめた日
わたしたちの目は
どこまでが黒目で

どこからが白目かも
もうわからなくなっている
スピーカーから流れる電子音声は今日もにこやかで
わたしたちと
わたしたちの子どもたちを
これ以上ないくらいにしあわせにする
両手を空にのばせば
抱きしめられたような気持ちになって
頭のなかを知らない音楽が流れはじめる
知らない楽器が奏でる
知らない音楽に
わたしたちはただ体を揺らしている

虚像

穂高　遊

彼女の美しい指先は震えていた
わたしは彼女を安心させたくて
できるだけ優しく微笑んでみせた
どうやら上手くはいかなかった
彼女は頬を僅かに引き攣らせただけ

彼女はわたしでありわたしは彼女になる
同じラインストーンが煌めいている
彼女の指先は美しく
わたしの指先も美しいのだから
同じディープブルーが艶めいている
何も心配することなどない
彼女はわたしでありわたしは彼女になる
魔法の呪文を唱えても
彼女の美しい指先は震えていた

わたしは彼女を安心させたくて
この肌に思い切り爪を立てた

silent letter

穂高 遊

いつの間にやらここに居たのか
樟脳のにおいが染みついた
古いあかずの箪笥の中には
むかしむかしの酸素と闇と
記憶の破片がしまわれていて
何にもなれない何かの瞳が
ちがう世界へ旅立つその日を
夢見ているとか
いないとか

清明

戸嶋　歩

コートは要らなかった
湿った手で
買い物かばんをベッドの上に投げる
春の空気は身体にわるく
気付けば浸水している靴のように
生き物の香りが肺いっぱいに満ちてくる

いつまでも西日が射していて
時間の長さがわからない
熱をふくんだカーテンをひらいて
覗いた窓のむこうでは
燕の巣がくずれていて
世界遺産の遺跡と同じ色で
軒下にはりついている

ワンルーム

戸嶋　歩

月光がさしこむ
本来の使い方ではないから
ベッドが狭いと思う
やわらかくて少しつめたい肩にふれる
いつのまにか
きみの香りがシーツ一面に染みている
明日ねむるときまで
同じつよさで残っていることを想う

きみをいま揺り起こして
夢の内容をおしえてもらうような
上手なコーヒーの淹れ方をたずねるような
勇気のないわたしは
黄色いビスケットを代わりに口に運ぶ
ほろほろと
わたしの水分をビスケットが奪う

散歩日和

志邑 左記

洗濯物が飛ばされて
ぼくはしぶしぶ家を出た
裏の駐車場に落ちたTシャツは洗う前より汚れている
砂っぽいそれをたたきながら
ぼくはコンビニへ行ったけれど
ほんとうに手ぶらで出てきたのを忘れていた
部屋へもどると不在着信が二度
そのあとにひとつメッセージが来ていた

つよい風に逆らうように
歩いているとき春だと思う
さっきひろったTシャツを着て
今度は新発売のコーヒーをちゃんと買った
飲んですぐ店の前のゴミ箱に捨てた
帰り道には三歩で渡れる橋がある
ぼくが投げた携帯電話は
汚い放物線を描いて落ちてった
すぐ浅い川の底にあたって
画面は一度光って消えた

春になる

久間木　志瀬

頼りない胸のうすさが
カルアミルクのうすさにかさなる
甘いものを摂るたびに
からだが花に近づいていることに気づく

春になる

そとから聞こえてくる声が変わる
庭を横切る黒い猫が
はいている白い靴下を
自分が編んだもののように思う

春になる

声をかける前に手で触れると
突然君の骨に触れてしまうことは
よろこばしい記憶としてある
風がもたらすあわい寒さのように

春になる

咲かずに落ちるだろうなと思いながら
摘んできたつぼみを瓶にさす
からだは台所に置かれているが
本当はだれ一人ここにはいない

眠らないの

土地の言葉

篠尾　早那

その土地にしかない
細かな言葉の感覚があって
それが伝わらない寂しさは
晴れの日も雨の日も
変わらず素知らぬ顔で立つ
カーネルサンダースに似ている

この土地では
手袋をつけることはあっても
履くことはなくて
マフラーがいずいと騒ぐこともなく
雪のない冬が終わる

雨がカーネルサンダースを
すぐに削らないように
雪のふらない冬が来るたびに
わたしはゆっくりと
身に染みた言語を隠して
この土地の感覚になれてゆく

禰覇 楓 Kaede Neha	時間がいっぱいあるようでそうでもない。じわじわ家具を増やしています。
二三川 練 Ren Fumigawa	詩がだいぶ溜まってきたのでそろそろ一度まとめたいという気持ちがあります。
穂高 遊 Yu Hodaka	今年の5月に北海道へ行く計画があったのですが、頓挫してしまいました。また来年。
戸嶋 歩 Ayumu Kojima	春になると湧いてくる感情たちのことがだんだん白魚のお寿司みたいに思えてきました。 そして名前が変わりました。読みは こじまあゆむ です。よろしくお願いいたします。
志邑 左記 Saki Shimura	引きこもり体質だと思っていたんですが、気のせいだということが分かった。 今度キャンプ用の椅子を買ってベランダに置く予定。
久間木 志瀬 Shise Kumaki	エッセンシャルダメージケアってすごい言葉だと思う
篠尾 早那 Sana Shinoo	雪の少ない冬は寂しいですが、桜と雪が一緒に見られる四月は気に入っています。

春のクレプスカ 2020

発行・詩会クレプスカ［ Twitter :@krepuska001 ／ Mail :krepuska001@gmail.com ］

発行日・2020年5月6日　　編集・禰覇 楓　　表紙・戸嶋 歩

クレプスカの
サイトが
できました！

http://krepuska.starfree.jp/

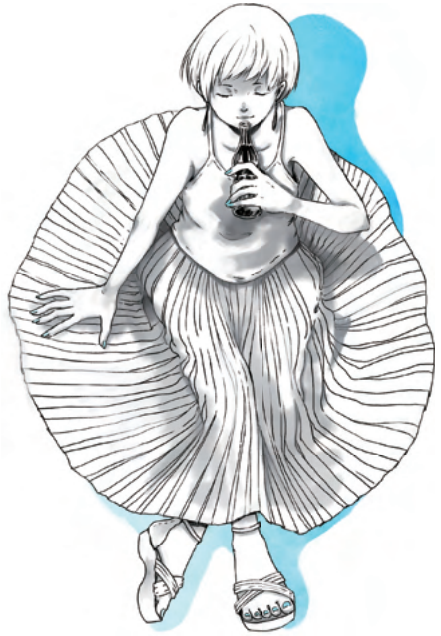
クレプスカとは？

概要

江古田周辺を拠点に活動する詩作サークルです。
（以前は日本大学芸術学部文芸学科を拠点とする学生サークルでしたが、
2018 年度以降社会人・学生混合の学外サークルとなりました）

クレプスカ＝krepuska はエスペラント語で「薄明な」という意味。

月 1 回詩作品を持ち寄り合評します（江古田周辺・土日どちらかの開催）。
年に 1 度機関誌を発行し、文学フリマ（5 月・11 月）で頒布します。
普段は自由創作ですが、匿名詩会や即興詩会を行うこともあります。



連絡先

Twitter: @krepuska001
mail: krepuska001@gmail.com